

さよならゆうれい

鷺田ヨウ

母が倒れた日の事は今でも鮮明に脳裏に焼き付いている。

初めて抱えた身体の重さも、医師に宣告された言葉も、抜け殻の身体を眺める日々も、別れを言った悲しみも。

あれから半年が経ち、時間の流れは恐ろしい程に早かった。そのくせ世間で言う所の「心の傷は時間が癒してくれる」なんて魔法の言葉は一切効力を発揮してくれやしない。

摩耗した日々の中で実家で遺品整理を行っていると、思い出の品々を手につつ度に母との記憶が蘇った。その中でも鮮烈に残っている思い出があった。

小学生の私が帰宅すると、西日が微かに差し込む暗いリビングでホラー映画の『呪怨』を一心不乱に鑑賞する母の姿だ。

食い入る様に画面を見つめる母は「おかえり」と一言添え、また画面を見直した。なんて不気味なのだろうと当時の私は慄き、冷や汗で背を濡らし早足で自室に向かったのは良い思い出だ。

思い返すと母との思い出はホラーで繋がっている事が多かった。母は無類のホラー好きだった。その影響なのか遺伝なのか、私は筋金入りのホラー好きに育った。

『本当にあった呪いのビデオ』シリーズは十何巻辺りからDVDを欠かさず借りては一緒に鑑賞し、『貞子VS伽椰子』や『来る』などのホラー映画は公開初日に劇場へ足を運び、共に恐怖を共有した。

酒を飲める年になってからも、よく母と酒の肴にホラー談義をよくしたものだ。

母は生前、酔いが回ると「私が死んだら化けて出てやる」と常々口にしていた。

そんな些細な台詞を思い出した私は、ある時から死んだ母の霊を探すようになった。

ある日、夜勤終わりの午前2時頃。俗に言う丑三つ時。疲れとストレスをシャワーで流

していると、ふと今この瞬間に母が霊として出てきたらといった考えが私の脳裏を過つた。^{よま}身体中から血の気が引いていくのを感じながら私はシャンプーを洗い流す。髪を洗い流してる最中、母の霊に背中を触られるのではないか。鏡の曇りを手で拭うと、そこにいる筈のない母の霊が映っているなど。

冴えた思考回路で母の霊が出てきそうなシチュエーションを想像しては、待ち構える恐怖に身を震わせた。

不意に何かを感じた私の意識は浴室のすりガラス製の窓へと向く。

母の霊が出てくるのなら絶対にここだと確信した。何故なら、単純にそれが怖いからだ。感情は恐怖に飲まれるも、同時に霊となった母でも会いたいと思ってしまう。

そんな期待が私の視線を窓の方へと向けさせる。

恐怖に苛まれる私は、意を決して窓の方へと振り向く。

が、そこには母の霊の姿などはなく、ぼやけたくらい景色だけが映っていた。

それから数日。実家の和室で遺品整理を行っていたある日には、やや開いている襖の奥の暗闇を見てはまたしてもホラー思考に駆られる。じつとりとした雰囲気の中、滑りの悪い襖がゆつくりと開き、中から歪な動きをした母が這い出てくるのではないかと。

また、ある日の芯や。寝つきが悪く、ベッドの上でひたすらに寝返りを繰り返す。ふと寢室の角に目を向けると、おぼろげな様子で突っ立つ母の霊がいるのではないかなど。

だが、私の想像する全ての怖いシチュエーションに母の霊は登場しなかった。

そんな無意味な妄想を繰り返すだけの毎日を過ごす中で、いつの間にかあれ程までに好きだったホラーが少し嫌いになっていた。

ホラーをこよなく愛した母が霊として出てこない訳がないと強く思っていた私は、いつの間にか霊の存在自体を否定するようになっていた。

雑念を払うように私は目の前の仕事に打ち込んでいると、運転中に仲睦まじい様子で歩いている子供とその母親とすれ違った。

ふいに雨に打たれるような感情に襲われ、私はハンドルを強く握る。あと何回歯を噛み締めれば、この思いは晴れるのだろうか。そんな事を思い浮かべて私はラジオを切った。

そんなある日、生前母と親交の深かったご友人と話す機会があり、待ち合わせ場所のファミレスへと足を向かわせた。

私が拙い口調で母が亡くなった経緯や思い出話を話す中、ご友人の方が言ってくれた「お母さんは本当に幸せだったと思いますよ」という一言が、私の黒々とした考えを改めさせた。もしかしたら、思い残す事がないから化けて出てこないのではないかと。

こんなオカルト紛いな妄想に推測論を足しただけで、私の暗く淀んでいた心はいつの間にか澄んでいた。

それからは笑える日々が続き、時には母を思い出し泣く。それでもポジティブな言葉を受け入れられるようになり、たまにホラーを嗜んでは恐怖に悶えた。

そんな忙^{せわ}しない日々を過ごすうちに、いつの間にか母の霊を探す私はいなくなっていた。こうして母がいなくなった世界の秒針を進めていくのだと、私は前向きに捉えられるようになった。

そんな今だからこそ母に向かって言ってみよう。怖いから化けて出てこないでくれ、と。